

# 心療内科における抑肝散加陳皮半夏の有用性

— イライラ感に対する効果 —

中部労災病院 心療内科 芦原 睦 山下 真

キーワード

- 抑肝散加陳皮半夏
- イライラ感
- ストレス関連疾患

心療内科の実地診療において、向精神薬投与によりうつ・不安が軽減されてもイライラ感が残る症例を経験することが多い。われわれは向精神薬投与でもイライラ感を訴える患者に対し、抑肝散加陳皮半夏を投与することで、向精神薬を変更・増量することなく症状が改善する症例を認めている。また向精神薬の減量・離脱が可能となった症例も認めている。従来より当科ではストレス関連疾患に対して向精神薬と漢方薬の併用療法を日常診療に取り入れており、抑肝散加陳皮半夏も有用性の高い漢方薬と考えている。

## はじめに

先の見えない経済不況の中で、雇用の不安や生活苦を感じながら暮らす人々が増えている。そのような現状を反映してか、日々の生活の中でストレスを感じたりイライラしている人も多く、これらの症状を訴え心療内科を受診する患者が増加している。

心身症などのストレス関連疾患に対し、当科では主に向精神薬等による薬物療法を行っているが、西洋薬の投与だけではイライラ感が改善しない患者も多い。このような、向精神薬内服にもかかわらずイライラ感を訴える患者に対し、抑肝散加陳皮半夏を投与しその臨床的有用性を検討したので報告する。

## 対象および方法

対象は、2008年2月から同年11月に当科外来を受診した患者で、イライラ感のために抑肝散加陳皮半夏を投与した17例（男性8例、女性9例、平均年齢 $41.8 \pm 12.7$ 歳）である。対象症例の診断は気分障害7例、不安障害2例、神経性大食症2例、緊張型頭痛2例、過敏性腸症候群、円形脱毛症、全身性エリテマトーデス、線維筋痛症が各1例で、全例が向精神薬内服中であった。投与中の向精神薬は抗不安薬、抗うつ薬で、抗精神病薬の投与例はなかった。

向精神薬の変更や増量することなくクラシエ抑肝散加陳皮半夏エキス細粒7.5g/日(EK-83)を分3で投与した。

抑肝散加陳皮半夏投与前後でのイライラ感について調査し評価を行った。投与開始前と投与開始後2

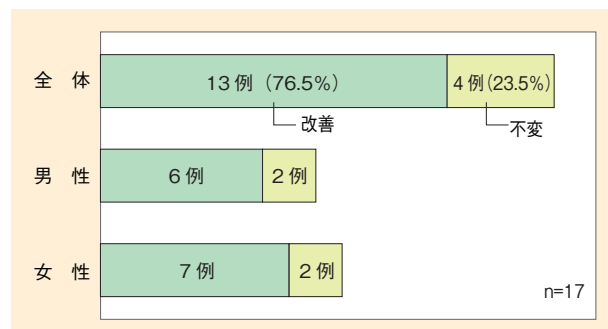
～4週間における外来受診時に、担当医が症状の変化を問診した。また自己評価式抑うつ性尺度(Self-rating Depression Scale:SDS)、状態・特性不安検査(State-Trait Anxiety Inventory : STAI)、東邦大式Medical Index (TMI)などの心理テストの変化についても調査した。

## 結果

抑肝散加陳皮半夏投与後のイライラ感の変化を図1に示した。17例中13例でイライラ感が改善し、全体の改善率は76.5%であった。男女別には、男性8例中6例、女性9例中7例に改善を認めた。改善例の中には、抗不安薬が離脱できた症例やイライラ感の改善とともに頭痛が改善した症例も認められた。

抑肝散加陳皮半夏投与前後でのSDS、STAIの平均得点は減少したが、統計学的に有意差は認めなかった。またTMIの変化では、質問項目のうち、「易怒性」を表現する「すぐカーとなったりいらいらしたりしますか」に対して「はい」と答えた割合が、

図1 抑肝散加陳皮半夏投与後のイライラ感の変化



投与前60%から投与後40%と有意な減少を認めた。TMI全体ではやや改善傾向を示すものの有意差は認められなかった。

## 考察

心療内科での診療において、向精神薬投与によりうつ・不安が軽減されてもイライラ感が残る症例を経験する。今回の検討ではイライラ感を訴える患者に抑肝散加陳皮半夏を投与し、向精神薬を変更・増量することなく症状の改善が期待できることを認めた。また、抑肝散加陳皮半夏投与により症状が軽減された結果、向精神薬の離脱・減量が可能となった症例も認められた。さらに易怒性に有意な改善を認めたことは、直接イライラ感の改善を示すものである。

以上より、抑肝散加陳皮半夏はイライラ感を訴えるストレス関連疾患に対する向精神薬との併用療法に有用な漢方薬と考えられた。

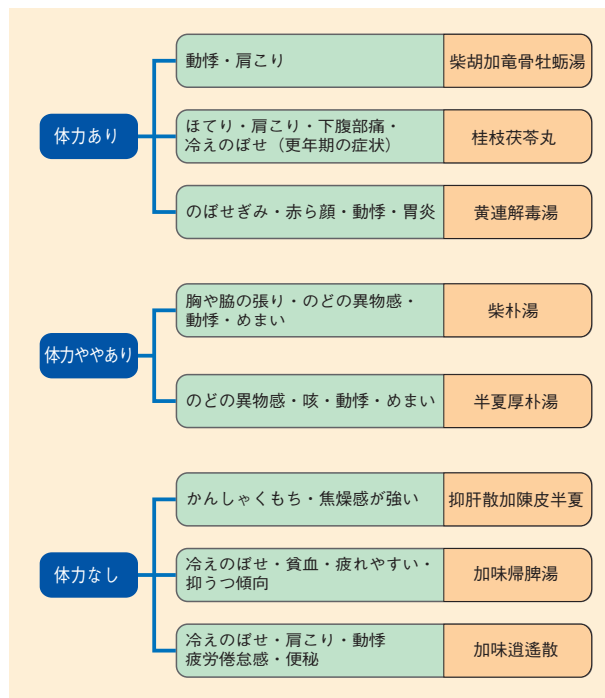
抑肝散加陳皮半夏は虚証から虚実中間証に適応とされ、本来、幼小児の夜泣きやひきつけ、神経症に臨床応用されていた処方である。現在では成人においても不眠症や精神・神経症状を中心に広く用いられている。篠崎は、イライラ感を主訴とする症例に対する抑肝散加陳皮半夏の有効性(効果発現:2~4週)を報告している<sup>1)</sup>。また関矢らは、慢性頭痛の症例に抑肝散加陳皮半夏が有効であったと報告している<sup>2)</sup>。われわれもイライラ感・易怒性への有用性を認めた他に、イライラ感とともに頭痛が完全に消失した症例や頭痛時の鎮痛薬(ロキソプロフェン)の使用頻度が著明に減少した症例を経験している。

以上のことから抑肝散加陳皮半夏は、イライラ感が改善するのみならず、イライラ感に伴う頭痛などの随伴症状の改善も期待できると考えている。

心療内科の臨床では、ベンゾジアゼピン系を中心とする抗不安薬や抗うつ薬の使用が一般的である。しかし、これらの薬剤は長期間にわたる継続投与によって薬物依存という問題を生じるため、向精神薬の離脱・減量が治療のポイントとなる。当科ではストレス関連疾患に対して漢方薬による向精神薬の離脱・減量を積極的に試みている。これまでも加味帰脾湯や柴朴湯を併用し、向精神薬や睡眠薬の離脱・減量が可能であったことを報告している<sup>3,4,5)</sup>。

図2は当科で行っている不眠・イライラ・不安に対

図2 不眠・イライラ・不安に対する漢方治療<sup>6)</sup>



する漢方薬の使い分けである<sup>6)</sup>。漢方治療では随証治療を行うことで各漢方薬がより有効となり、患者のQOLを高めることに繋がると考えている。

## まとめ

当科にて向精神薬内服下でもイライラ感を訴える患者に対して抑肝散加陳皮半夏の投与を行い、症状の改善を認めた(有効率76.5%)。抑肝散加陳皮半夏は、イライラ感を伴うストレス関連疾患に有用性の高い漢方薬と思われる。

## 参考文献

- 1) 篠崎 徹:イライラを主訴とする神経症30例に対する抑肝散加陳皮半夏の効果 漢方診療18(2):42-44, 1999.
- 2) 関矢信康ほか:慢性頭痛の予防療法としての抑肝散加陳皮半夏の応用 日本東洋医学会誌58:277-283, 2007.
- 3) 芦原 陸ほか:加味帰脾湯の併用により向精神薬が減量もしくは離脱し得た症例の検討 日本東洋心身医学研究8:27-32, 1993.
- 4) 中橋幸代ほか:加味帰脾湯の併用による睡眠薬(ゾルピデム)の減量効果の検討 日本東洋心身医学研究18:23-27, 2003.
- 5) 芦原 陸ほか:パニック障害における漢方治療-柴朴湯を中心に 日本東洋心身医学研究13:29-33, 1998.
- 6) 芦原 陸:女性が抱えるこころとからだの悩み「ストレス病」における漢方治療 フジメディカル出版 2008.